

友達と私

～長い時間を共に～

4グループ 伊藤かいな(いとうかいな)

今の私にとって大切な社会は、友達との間にある。家族や大学とも悩んだが、私の中で家族はもはや自分自身のような存在で安定している。また、大学ではいよいよ自分の将来へ向けて専門的な知識を学ぶことができるため大切な場所であるが、テスト前や課題提出の前など忙しく辛いときは友達と協力し、支え合いながら頑張っており、その存在があるからこそ楽しい大学生活を送ることができていると思う。

これらに加え、大学生になり今までとは大きく異なる環境に置かれ、周りの友達のがらりと変わった。特に感じたのは、出身地の範囲の変化である。小学・中学・高校では、転校生を除けばほとんどが県内の人で、出身地域もだいたい同じようなものだった。それに対し大学ではこの範囲が一気に全国になったのだ。お隣の岩手県や青森県、宮城県などの東北地方をはじめとし、栃木県や静岡県などの関東地方、中には本州の端である岡山県出身だという人もいた。同じ日本でも県をまたげば方言や家庭料理、伝統行事などその県によって特徴はばらばらであり、友達と会話をしていく中で、自分が当たり前だと思っていたことが実は自分の地域だけだったということが多々ある。例えば、秋田では修学旅行中の学生たちが、今、どこで、何をしているのかをテレビのCMで流す習慣があるのだが、他県の人にこの話をしたら驚かれた。また、“大丈夫、気にしないで”を表す“なんもだよ”という言葉が友達に使った時に意味が通じなかったことがあり、この時に初めてそれが方言だと知った。

このように、大学で知り合った友達は私の視野をどんどん広げてくれる。この新しい出会いは私にとってとても良い刺激であり、大切にしていきたいものであるため、この社会を選んだ。

散歩ではグランマートと大学近くの公園へ行った。私のテーマは友達だったため、正直グループの人と一緒にあればどこでも良かったのだが、公園であればピクニック気分を楽しめて、皆と打ち解け色々な話ができ友達としての距離が縮められると考えたからだ。また、その時は大学をテーマにするか迷っていたため、両方とも大学と近いところにあり少し関連があると思ったことも理由である。

集合は正門前。グループ内では一番乗りで、皆も早く来ないかなとわくわくする一方、何を話そうか、上手く話せるかという不安と緊張もあった。グランマートで昼食とお菓子を買って公園へ向かうと、幼稚園の子供たちが遊んでいた。子供たちと触れ合ったことで気持ちが和み、そこからお互いに口数が増えた。その後ご飯を食べながら、それぞれの国のこと、3.11の大震災のこと、今の生活のことなど、皆と意見交換ができ、有意義な時間が過ごせた。一人ひとりの違った考えを聞き、そういう視点もあるのかと自分の視野が広がると同時に、自分の考えがよりはっきりして深めることもできた。

今回の散歩を終え、新しい発見がたくさんある友達と私との間にある社会は新鮮で面白く、今の私にとって大切だと思った。

グループ内の話し合いでまず気づいたのは、私の考える“友達”には“大学の”が付くことだ。私は自宅生で、大学へは電車で約1時間かけて通っている。最近風が

強く雪の降る日も多く、電車で遅れや運休がでるようになった。つい先日も、私の利用している在来線が一部動かなくなった。この時周りのアパート生の友達が、「今日うちに泊まらない？」と声をかけてくれ、ああ、友達は良いなあとしみじみ感じた。その他に友達とのエピソードについて話したことも、大学の友達との出来事だった。中学・高校時代に親しく今でも連絡を取り合っている友達はたくさんいるし、思い出も数えきれない程ある。しかし、話し合いではその人たちとのエピソードは浮かんでこなかった。

次にわかったのは、環境が変わればテーマも変わるかもしれないということだ。私たちのグループは4人のうち2人が“友達”、もう2人が“今暮らしている社会”をテーマにしている。話し合いの中で私たちは、もし自分が留学生として外国へ行ったら、もし自分が留学生ではなく自国で生活をしていたら…と今の自分とは別の立場だったらテーマはどうなっていたかを考えた。すると、お互いにテーマが逆になった。今この環境下では“友達”以外のテーマは考えられない。しかし、自分が留学生として外国へ行ったらと想像すると、“友達”という小さい枠組みでは収められなかった。そこにいる友達も、そのこの大学も、そのこの地域も全てが同じくらい大事に思えて、結果“今暮らしている社会”が一番大切になるだろうと感じた。留学生としてこちらへ来ている2人も、もし自分が留学生ではなく自国での生活を続けていたら“友達”がテーマになっていただろうという意見だった。そもそも“今暮らしている社会”の中には“友達”も含まれており、生活している場所というよりはそこで関わっている人間という意味が強いようだった。ここでは、そのことについて考えている時間が長い程大切なレベルが高くなるということも発見した。

最後に、いくら大切といっても友達に不満を抱いたりストレスを感じることはないのか？という話になった。思っていることを正直に言い合うことができ、時にはけんかもしてぶつかり合うのが本当の友達であるというイメージが私の中では強かったが、私は友達とけんかをしたことがない。友達と意見が異なることはあるが、相手の考えを否定したりおかしいと思うこともない。これでは上辺だけの友達のように思われるかもしれないが、そうではない。私は大学で主に4人の友達と行動を共にすることが多いのだが、もちろん意見がばらばらになることもある。その場合は多数決で決めて少数派の人が多数派に合わせるのではなく、意見が同じ人同士で行動するのだ。例えば皆でご飯を食べに行くことになった時、和食が食べたい人はその人たちで、洋食が食べたい人はその人たちで食べる。このように、遠慮しなくても良い仲なのだ。大学生になってから知り合い出会ってからまだ日は浅いが、一緒にいて気が楽で、私はとても良い関係であると思っている。

では、他の友達では気を遣うのか？疲れるのか？と問われると、そうでもない。いつも一緒にいる友達の他にも仲が良い人はいるし、そこまで気を遣うこともない。ただ、4人の隣にいる時の方がより安心で、じっくりくるのだ。その大きな理由は、他の人たちよりも彼女たちと一緒に過ごす時間が長いからであると思う。だからと言って、この4人だけが大切なのではない。最初の方で述べたように、私は刺激も必要だと思っている。これを与えてくれるのは、4人よりもあまり親しくない人たちである。そのため、安心をくれる4人と、刺激をくれる他の友達の両方とも同じ位大切なので

ある。

今は、一日の中で友達と接し関わっている時間が一番長い。これまで述べてきたように理由は他にもたくさんあるが、グループ内の話し合いで気づいた通り、何よりも自分の時間をより長く費やしているため、“友達”との社会、特に“大学の友達”との社会が私にとっては大切である。